

ペルーの教育事情
—リマ市内外の3校の事例より—

田 中 麻 里・前田亜紀子

群馬大学教育実践研究 別刷
第30号 95～104頁 2013

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

ペルーの教育事情 —リマ市内外の3校の事例より—

田 中 麻 里・前 田 亜紀子

群馬大学教育学部家政教育講座

Situación Actual De La Educación En El Peru Investigación De 3 Colegios En Lima

Mari TANAKA, Akiko MAEDA

Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：教育事情、ペルー、小学校、中等学校

Keywords : Educational situation, Peru, Primary School, Secondary School

(2012年10月31日受理)

1. はじめに

群馬県には多くの南米出身者が居住している。2012年6月公表の都道府県別の国籍別外国人登録者（法務省）における南米出身者についてみると、全国1位の静岡県（49％）に次いで、群馬県（44％）となっている（図1）。

群馬県内の居住者の国籍をみると、最多はブラジルで、順に中国、フィリピン、ペルーである（図2）。また、図3の通り、県内の公立小学校に通う外国人児童は1,500人以上、中学校も500人を超えている。

こうした状況を鑑みて、群馬県教育委員会のHPには、「外国人児童生徒に関する資料（義務教育課、2010年3月）」が掲載されている。この目的は、外国人児童生徒の保護者への情報発信、啓発であり、学校教育制度や文化、生活習慣の違いから生じる誤解をできるだけなくすことにある。

外国人居住者が集中している太田市、大泉町は、「日本の公立学校の1日（ポルトガル語、スペイン語、タガログ語、中国語版）」や「就学リーフレット（ポルトガル語のみ）」の資料を制作している。HPにはこの他、

学校から各家庭に配布される資料や届出、行事の案内などを入手することができる。

群馬大学では、1996年から他大学の研究者と連携して外国籍児童生徒の教育問題に取り組んでいる。例えば、日系南米人児童生徒の在籍に対応するための教育実習の試行（高橋ら、2006）、日系南米人増加の実態をふまえた教員養成システム導入のための研究（古屋、2006）、外国人児童生徒のための初期指導用日本語教材の開発（田中、2010）、日系南米人児童生徒の就学義務化に対応する教育条件の整備と教員養成や研修の研究（所澤ら、2010）などである。

さらに、外国籍居住者のための外国人相談員のインタビュー研究（園田、2010）など、外国籍児童生徒の教育、就学を中心に据えながら、周縁に存在する様々な問題も含めて複合的な視点からも捉えている。

これまでの研究蓄積をもとに、2012年度からは外国籍児童の就学義務問題に取り組んでいる。諸外国の就学義務の法的扱いおよび実態を解明することを目的とし、就労目的で日本に滞在する外国人の多い、中南米、東南アジア、中国等の学校教育についての現地調査もその一つである。

今回我々は、ブラジルと同じ南米で、外国人登録者が多いにも関わらず、既往研究・現地調査が少ないペルーの調査を行った。学校の選定は、日本に滞在している南米出身者の多くが日系人であることから（外務省、2012）、リマ市内および郊外の日系人学校および、リマ市内の公立小学校を訪問した。調査は教職員への聞き取りと現地学校の様子の見学とし、日本の教育制度や学校での就学状況との違いを理解し、問題点を明らかにすることを目的とした。

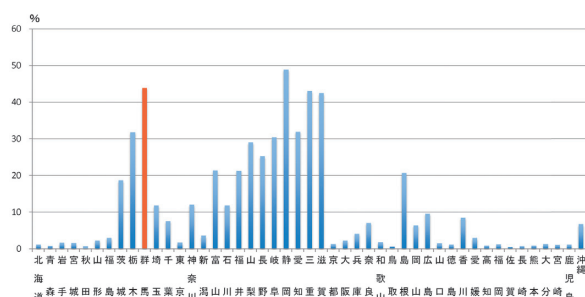


図1 人口に占める南米出身者の割合
(法務省2012年6月13日公表統計より作成)

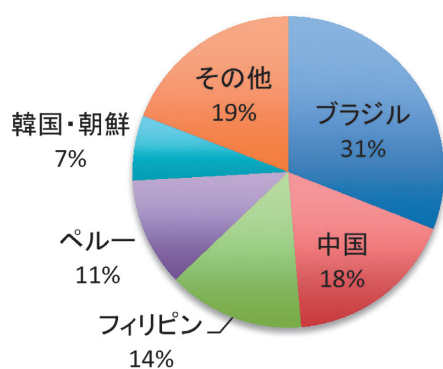


図2 群馬県内の国籍別外国人登録者の割合
(群馬県統計2011年12月より作成)

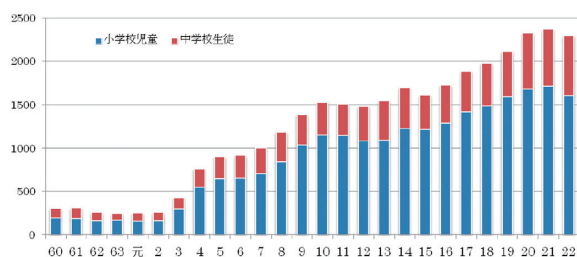


図3 群馬県の公立学校に通う外国人児童生徒
(群馬県統計2011年12月より転載)

2. ペルーの教育制度の概要

ペルーの教育制度および教育関連の法律については、工藤と江原（2011）、工藤（2011）に詳しい。ペルー教育省（Ministerio de Educación）には、総合教育法（Educación : Calidad y Equidad. Reglamentación de la Ley General de Educación No.28044）（『教育：質と公正 総合教育法 法律第28044号規定』）が定められている。

ペルーの義務教育は3段階に区分され、就学前教育、初等教育、中等教育である。就学前教育（イニシャル：Inicial）は1学年（6歳未満）だが、小学校入学に就学前教育、いわゆる幼稚園の卒園資格は不要のため通園者は少ない。

初等教育（プライマリア：Primaria）は6学年（6～11歳）で、国立小学校は無償である。中等教育（セクンダリア：Secundaria）は5学年（12～16歳）である。ペルーの初等教育および中等教育は、落第と留年のある進級制のため、年齢と学年は必ずしも一致しない。

日本からペルーに帰国した子どもへのインタビュー研究（スエヨシ、2008）では、「日本の学校は成績が悪くても留年しないので、勉強しなくてもいい。」との回答を取り上げている。これは日本とペルーの教育制度の重要な相違点であり、日本の学校では学齢制が一般的であるため、義務教育期間における留年は極稀である。

リマには南米最古の大学、国立サンマルコス大学（1551創立）がある。高等教育（大学）は5年制（専門学校3年制）で、大学入学試験時に中等学校卒業証書（プライマリアとセクンダリア）が必要となる。

今回の調査では、これら証明書の現物を確認することはできなかった。また、証明書の発行に必要となる登校日数や成績についての法令や教育行政資料等も入手できなかった。就学不就学問題と切り離せない要因の一つとして、今後の調査課題とする。

3. 調査学校の概要

調査期間は2012年3月13日（火）～24（土）であった。学校訪問は、3月15日（木）リマ郊外の日系私立校ホセ・ガルベス幼稚園・小・中等学校（JOSE GALVEZ）、3月16日（金）リマ市内の公立校ペルー・ハポンNo.

2096小学校 (PERU JAPON, I.E. No.2096)、3月19日(月) リマ市内の日系私立校ラ・ウニオン小・中等学校 (La Union) であった。

調査方法は教職員へのインタビューであり、質問項目は、ペルーの教育制度、学校規模、学費、成績、授業の進め方、進級制度、教師の待遇等についてヒアリングを行った。以下調査日程順に各学校の特徴や日本との相違点をまとめる。

3. 1. 1. 日系私立校ホセ・ガルベス幼稚園・小学校・中等学校 (JOSE GALVEZ Colegio Particular Peruano Japonés)

1926年に設立されたペルー最古の日系人学校である。リマから車で1時間ほど北上した海辺のカヤオ市 (Callao) にある私立学校で、幼稚園、小学校、中等学校が同じ敷地内に併設している。

授業時間は、幼稚園が7:55~13:00、小学校と中等学校は7:55~14:30であった。ペルーの公立学校の多くは2部制 (午前または午後のどちらか通学) または3部制 (2部制+夜間部) だが (西村, 2001、杉崎, 2003)、ホセ・ガルベス校は1部制であった。これは、学校設備や学費にも関係するが、日系私立校のほとんどは1部制であり、提携行事なども行われることから、統一されている。

2012年の学期日程を表1に示す。3学期制で各学期が約3ヶ月単位となっている。1学期は3月スタートであり、2学期の中間試験後の7月下旬に休みがとられている。3学期の終業式後は、3月の新学期まで約3ヶ月もの長い休暇となっており、日本の学期制とは大きく異なる点と言えよう。

表1 ホセ・ガルベス校 学期日程

1 学期	3/5~6/1	中間試験	4/9~13
		期末評価	5/28~6/1
2 学期	6/4~9/14	中間試験	7/16~20
		期末試験	9/10~14
		休 暇	7/28~8/12
3 学期	9/17~12/21	中間試験	10/25~31
		期末評価	11/10~14
		閉 鎖	12/22

2012年度の学費は、年度当初にかかる費用 (登録料、評価、本やノート、学校便覧、ドリルなど) が、幼稚園

園185ソル (6,105円)、小学校215ソル (7,095円)、中等学校235ソル (7,755円) と、3月から12月の月謝はそれぞれ、115ソル (3,795円)、170ソル (5,610円)、190ソル (6,270円) となっており、これに任意で学校保険料125ソル (4,125円) を支払う。ソルはペルーの通貨で、1ソルを約33円として換算した。

小学校・中等学校の児童生徒は、必ず連絡帳を使用しており、毎日、教師と親にみせることになっている。

3. 1. 2. 学校規模、制服

子どもの在籍数は、幼稚園45人 (3~5歳児毎の3クラス)、小学校133人 (1~6各学年の人数: 14人、26人、18人、24人、24人、27人)、中等学校121人 (1~5各学年の人数: 24人、20人、29人、24人、24人) で、小・中等学校は各学年1クラスと小規模である。教員は全25人であった。

調査訪問した3校の建物様式はほぼ同様に、写真1のように高い外壁に囲まれている。鉄の正門は登下校時以外、施錠されている。中に入ると中央にコンクリートの校庭があり、取り囲むように2~3階建ての校舎が配置されている (写真2)。

幼稚園は校舎の1階部分に教室が配置されており、3歳きいろ組、4歳みどり組、5歳みずいろ組というように、各クラスに日本語の色名がつけられていた。教室内の本棚や机、ファイルや小物類もクラス (年齢) 色で統一されていた (写真3)。

小学生は教室内で一人ずつ個別の机と椅子を使用していたが (写真4)、中等学校では生徒2人でひとつの長机に各自の椅子を使用していた (写真5)。小・中等学校の教室には全て、黒板とスクリーンがあったが、プロジェクターは見受けられなかった。コンピュータールームが別室にひと部屋あり、ブラウン管型モニターのPCが十数台あった。

これも訪問先3校全てに共通していたが、学内に飲食食品を取り扱う売店があった (写真6)。清涼飲料水やクッキー、バーガー、カップヌードル、インスタント焼きそばが売られており、子どもたちが自由に利用していた。

ホセ・ガルベス校の方針で今年から、健康的な食べ物を販売するようにしているという。できるだけ手作り、カロリー減、野菜中心のバーガーやサンドイッチを販売していることが紹介された。また、売店の隣には



写真1 ホセ・ガルベス校 外観



写真2 ホセ・ガルベス校 校舎と校庭



写真3 ホセ・ガルベス校 幼稚園（みどり組4歳児）



写真4 ホセ・ガルベス校 小学校



写真5 ホセ・ガルベス校 中学校



写真6 ホセ・ガルベス校 売店

食堂もあり、小・中等学校の児童生徒が毎日10～15人利用している。営業時間は9:00～13:00であった。

日本の小・中学校では、スナック菓子やインスタント食品が学校内で販売されているところはなく、ましてや学校に金銭、小遣いを持って行く習慣もない。昼食は給食や弁当であることから、学校での習慣や食習慣に対する考え方の違いを理解しないことで齟齬が生じる。

制服は背面にJOSE GALVEZ、および日本語でホセ・ガルベス校とプリントがされたTシャツにトレーニングパンツで、下衣は半ズボンと長ズボンの2種類の丈があった。教室での帽子の着用、ピアスやイヤリング、髪飾り、時計やアクセサリーをしていることで教師が児童生徒を注意することはない。

3. 1. 3. 日本とのかかわり、教職員について

在籍している日系人児童生徒数は確認できなかったが、授業が行われていた全ての教室を見学したところ、クラスに1、2名程度であった。ホセ・ガルベス校は日系私立校だが、2008年の調査結果によれば、日系人の割合は10%程度であった（スエヨシ、前出）。

Henner Ortiz Jauregui校長は、南米最古でペルーの名門国立大学サンマルコス大学教育学部を卒業し、ホセ・ガルベス校の校長となって10年であった。やりとりはスペイン語のみであった。

秘書のC Kさんはアルゼンチン出身で、スペイン語、日本語、英語が話せる。日本での出稼ぎ中に日系ペルー人のOさんと出会い結婚、埼玉県上尾市に住んでいた。中2と小2の男の子がおり、長男は日本の小学校1～4年生に通っていたという。

Ｏさんの祖父は元日系人協会会長で、Ｏさんは現在会員とのことであった。今回我々が訪問することを知り、学校に来て下さっていた。歴代の日系人協会会長の顔写真が掲げられている教室もあった。彼もスペイン語と日本語が話せる。

ペルーの日系人保護者が日系校に子どもを通わせる理由の一つが日本語（外国語）教育にあるという。しかしながら、日本人教員はペルーの教員免許を必ずしも有していなくてもよく、日本滞在経験があり日本語が話せる人であれば教員になれる場合が多いという。

3. 2. 1. 公立小学校ペルー・ハポンNo.2096校 (PERU JAPÓN, I.E. No.2096)

1977年に設立された公立小学校で、校名のNo.はペルーの公立学校に付されているものである。ペルーの小・中等学校に相当するコレヒオ (Colegio) の数は、2009年時点で5万7,385校に及ぶ(石田, 2011)。公立学校は2部制(午前と午後)で、児童も教員も午前と午後で入れ替わる。校長先生だけは一日中、勤務している。

学校は、1969年にリマで実施された低所得者のためのハウジング国際コンペティションが実施された場所に位置している。最終的にこのコンペでは最優秀賞案だけでなく、参加したチームすべての案が建設された。学校の敷地は日本案の住宅地と道路を挟んで向かい合っているため、ペルー・ハポンと名前がついていると考えられる(写真7)。

また、創立時から日系人の平岡一族からパソコンをはじめ学校備品の寄付を得ていることと関係しているかもしれないが、詳細は不明であった。平岡一族はリマで電器製品店を開き、事業で成功したのち、その利益をペルーに還元している。2004年に平岡氏は亡くなったが、後継者が現在も寄付を続けているという。

3. 2. 2. 学校規模とクラス分け

2部制の午前午後をあわせた児童数は1,400人で、うち12人が障害をもつ児童である。1～6年生まで各学年6クラス(A～F)があり、1クラスは約39人でホセ・ガルベス校と比べ児童数が多い。午前と午後で半分の3クラスずつの授業が開かれている。教室もその分しかない。写真8は小学校低学年の教室の様子である。

午前午後の区分とクラスは6年間同じだが、担任は2年ごとに変わる。また、午前の希望者が多いため、午前午後の決定は入学時に抽選(くじ引き)で決める。ただし、すでに兄弟が通っている場合は、兄弟の時間に合わせて弟妹のクラスが決まる。写真9は午前クラスの下校風景である。

小学校入学は6歳の誕生日を過ぎてからで、通常は義務教育期間の11歳まで在籍する。1年生に落第はないが、2年生から落第制度があるため、13、14歳まで小学校に在籍する場合もあるという。11歳以上の児童は全校生徒の0.5%くらいで、15歳以上になると3部制の夜間学校へ移る。



写真7 ペルー・ハポン校 外観



写真8 ペルー・ハポン校 教室の様子



写真9 ペルー・ハポン校 午前クラスの下校風景

3. 2. 3. 教員について

ANA FERRER CISNEROS校長は、10年間教員として教えた後、教頭2年、校長2年（全て小学校）を経験している。UNIFE大学教育学部（国立の総合女子大学）を卒業しており、大学生と小6の子どもがいる。小6の息子はペルー・ハボン校に在籍している。

現在、リマ市内にある私立CESAR VALLEJO大学大学院の通信制で学んでいる。校長先生だけでなくペルー・ハボン校の全教員40人のうち7割をしめる28人が教員をしながら大学院に通っているという。学費は全て自己負担だが、大学院（Master）の免許（日本で言うところの専修免許）を取得することができ、給料が上がるというお話だった。平日は通信教育（インターネット）で勉強し、週末大学へ通う。また、文科省による教員試験（PC、Math、Psychology、English）があり、上位成績者はさらに給料面で優遇措置がなされるという。

公立学校教員の平均月給は、1,100ソル（36,300円）で、役職や免許等で1,800～2,000ソル（59,400～66,000円）の待遇だという。物価は日本の1/4程度だが、男性の教員は少ない。

3. 2. 4. 学校運営方針

小学校入学時に試験はないが、この学校では6年生の4月と卒業時に試験をして学力到達度をみている。科目は、Comunicación（スペイン語）とMatemática（算数）の2科目で、ペーパーテストを実施し、各教科の責任者（教員）が判定する。写真10はその成績表である。ペルー・ハボン校は日系校ではないが、表紙には両国を象徴する写真が使用されている。

校長先生は、教員のノートや授業中のクラスの様子をチェックし、改善点などを教員間で話し合うという。ノートチェックは、火曜日1、2年生、水曜日3、4年生、木曜日5、6年と決まっていた。公立小学校は学費が無料のため児童数も多いが、授業改善に熱心に取り組んでいることが窺えた。

写真11に5年C組の時間割を示す。科目は主要4科目（スペイン語、算数、理科、社会）の他、体育、宗教、英語、コンピュータなどがある。これまで公立学校の教科書は有償だったが、2012年から写真12の主要4科目については無償になった。現ウマラOllanta Humala大統領（2011～）は教育全般、特にコミュニ

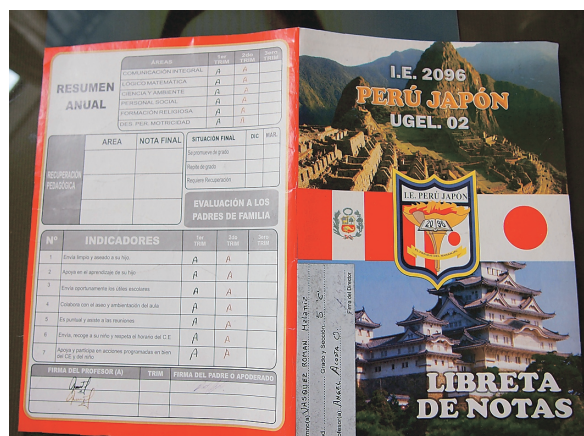


写真10 ペルー・ハボン校 成績表

Horario	Lunes	Martes	Miércoles	Jueves	Viernes
8:00	COMUNICACIÓN Y.R.V.	MATEMÁTICA Y R.M.	COMUNICACIÓN Y.R.V.	MATEMÁTICA Y.R.M.	RELIGION
8:45	COMUNICACIÓN Y.R.V.	MATEMÁTICA Y R.M.	COMUNICACIÓN Y.R.V.	MATEMÁTICA Y.R.M.	RELIGION
9:30	MATEMÁTICA Y R.V.	COMUNICACIÓN Y.R.V.	CIENCIA Y AMBIENTE	CIENCIA Y AMBIENTE	PERSONAL SOCIAL
10:15	R E C R E O				
10:35		COMUNICACIÓN Y.R.V.	CIENCIA Y AMBIENTE	CIENCIA Y AMBIENTE	PERSONAL SOCIAL
11:20	EDUCACIÓN FISICA	PERSONAL SOCIAL	INGLES	COMPUTO	LAPTOP XO
12:05	EDUCACIÓN FISICA	PERSONAL SOCIAL	INGLES	COMPUTO	ARTE
12:50					

写真11 ペルー・ハボン校 時間割（5年C組）



写真12 ペルー・ハボン校 無償の教科書



写真13 ペルー・ハボン校 簡易ポータブルPC

ケーション（スペイン語）に力を入れており、簡易ポータブルPC（写真13）が児童1人1台用意され、学校で保管していた。

ペルーの学校では日本にない、Maestro（教師）の日というものがある。ミサや両親を交えた会食、日帰り遠足、自然キャンプなどを行っている。今年はミサと先生と保護者のみの日帰り旅行を実施している。

3. 3. 1. 日系私立校ラ・ウニオン小・中等学校 (La Union)

ラ・ウニオン校はリマ最大の日系私立校である（写真14）。前身はサンタ・ベアトリス校（1928年創立の日系私立校）で児童生徒数の増加のため、1972年にサンタ・ベアトリス校を系列の幼稚園として分離し、現在にいたっている。

ラ・ウニオン学校はアソシアシオン・エスタ・ディオ・ラ・ウニオン・アエル（AELU）という日系総合運動施設と提携している。ペルーは1990年代初頭まで治安が悪く、子どもが外で遊ぶことができなかった。学校が高い塀で囲まれているのはそのためだが、ラ・ウニオン校が提携しているAELU運動施設は、児童生徒および保護者にとっても魅力である。現ウマラ大統領など、著名人の卒業生を輩出している。

日系人の児童生徒の割合は約3割で、他の日系コミュニティ学校より多い（スエヨシ、前出）。

3. 3. 2. 学校規模、学費、設備、制服

7：40～15：15までの1部制である。児童生徒の総数は980人で、小学校は6学年、各学年5クラス、中等学校は5学年、各学年3クラスであった。教員は80人で、小学校担当、中等学校担当、両方担当に分かれている。教員は、7：30～15：15まで授業等を行い17：30頃帰宅する。

教員とは別に心理カウンセラーが5人おり、毎日7：40～15：30、生徒からの相談を受けつけている。ペルーでは20年ほど前からカウンセラーを配置するようになったが、公立校のカウンセラーは1人がほとんどである。

授業料は、700ソル／月（23,100円）でカヤオ市にある日系私立校のホセ・ガルベス校の約4倍と極めて高額である。それでも児童生徒や保護者も、ラ・ウニオン校を希望するという。

児童生徒は制服で登校し、制服の種類は1種類で、体操着も指定のものがある。児童生徒のほとんどが体操着で授業を受けていた。また、各教室に液晶プロジェクターが配備され、中等学校のクラスではインターネットの動画を見ながら授業が行われていた（写真15、16）。

学校はリマの高層マンションなどが建ち並ぶ中心街にあり、学内は非常に広く清潔であった。また、建物の壁面には日本語で標語が書かれており、学内の掲示板には日本文化を紹介するコーナーや3.11東日本大震災復興を祈念する垂幕などがあった。



写真14 ラ・ウニオン校 校舎



写真15 ラ・ウニオン校 小学校授業風景



写真16 ラ・ウニオン校 中等学校授業風景

3. 3. 3. 入学試験と進級システム

入学時には、スペイン語、算数、心理テストの試験が実施される。日本に滞在していた子どもは、以前は入りやすかったが、今はスペイン語ができない児童生徒が多くなったため、非常に難しいという。

小学校1年生は自動的に進級できるが、小2～中等学校5年生には落第がある。進級試験はスペイン語と算数(数学)が基本で、小5、6年生は、加えて科学と社会の4教科で判定する。中等学校1～5年生は4教科のうち1つでも落第すると進級できず、1年間に2人程が落第する。

クラス替えは学力や成績よりも、子どもの社会面を考慮し決定する。小学校は2年毎に、中等学校は1～3年生と4～5年生の間に1回、クラス替えが行われる。小、中等学校ともに4学期制をとっており、日系私立校のホセ・ガルベスの3学期制とは異なっていた。

教師と家庭は連絡帳を用いてコミュニケーションをはかっている(写真17)。

3. 3. 4. 授業計画と教科書

私立学校の教科書は町の教科書販売店で各自購入しなければならない。どの教科書を使うかは先生が決める。教科書は全頁カラーで非常に高額である。ラ・ウニオン校の中等学校3、5年で使用されている「Persona, familiar relaciones humanas」を販売店で調査したところ、A4版で1冊約2,800円とかなり高額であった。

科目別にコーディネーターを設定し、毎週木曜日に各教員が授業案(日本の指導案のようなもの)をコーディネーターに提出する。これは授業1週間前に提出

しなければならないことになっている。各科目の職員会議が毎週1回行われている。

体育は前述のAELUの総合運動場やプール、体育館を使用して行っていた。AELUは日系人のための施設で、家族カードは110ソル/月(3,630円/月)で、さまざまな施設を利用することができる。大人一人の個人会員カードは30ソル/月(990円/月)である。

3. 3. 5. 教員

校長は名幸明美(なこうあけみ)先生で、ラ・ウニオン校を卒業後、私立の名門大学カトリカ大学(Pontificia Universidad Católica del Perú)の教育学部に進学し、卒業後は日系幼稚園のサンタ・ベアトリス幼稚園で14年間教えていた。この幼稚園は系列校なので、卒園児の90%がラ・ウニオン校に入学する。ラ・ウニオン校で教頭を4年間、現在は校長として4年目である。もともと幼児教育が専門のため、ラ・ウニオン校の特徴として、小学校1、2年生は体育以外に身体を使った運動活動を取り入れている(写真18)。

日本の学校のように朝礼がある。朝礼は7:40～8:05で、月曜日は日本とペルーの国歌を歌ったあと校長先生のお話を聞く。水および金曜日はラジオ体操を行う。

日本文化コーディネーターという教員が配置されており、訪問時にインタビューを行った、M先生、N先生を含め11人いる。

M先生はラ・ウニオン校の中等学校5年生と小学校2年生に娘が通っている。家族で日本滞在経験があり、当時は横浜市鶴見区に居住していた。長女は小5～中3まで横浜市内の公立学校で過ごしたので、高校と大

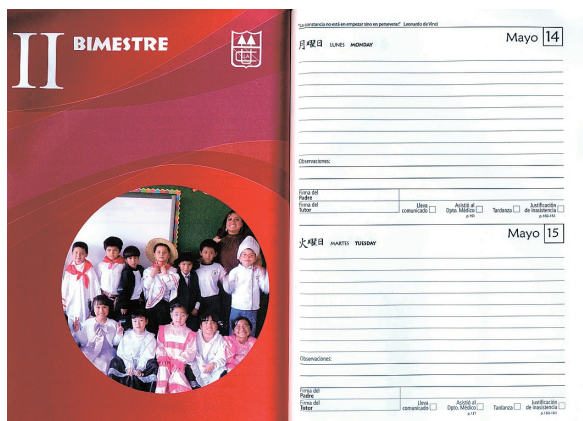


写真17 ラ・ウニオン校 連絡帳



写真18 ラ・ウニオン校 AELU総合運動施設で身体活動をする小学2年生

学は日本に戻ることを希望しているという。

3. 3. 6. 日系学校の行事

毎年4月29日は運動会を行っている。これはリマ近隣の日系校、日秘会館関係者も参加する行事で、7:00~18:00まで1日ばかりで盛大に行われる。参加校は、ホセ・ガルベス校、ラ・ヴィクトリア校(1948年創立)、ヒデヨ・ノグチ校(チャクラ・セロ校として1965年創立)、サンタ・ベアトリス校である。

ラ・ウニオン校独自の運動会も実施(10月14日)されており、卒業生も参加するラ・ウニオン校最大の行事となっている。ラ・ウニオン校の卒業生の絆は非常に強く、毎年多数の卒業生が参加するイベントである。

3. 3. 7. ラ・ウニオン校の卒業生

今回、本調査のコーディネーターのR夫妻は、ラ・ウニオン校の卒業生である。夫婦の年齢は5歳違うが、先の卒業生が集まる行事で知り合ったという。

妻の妹もラ・ウニオン校の卒業生である。しかし、兄弟はリマ市内にあるルーズベルトという米国のインターナショナルスクールを卒業している。この学校は教育課程が選択でき、①ペルーの教育制度に基づく課程、②アメリカの教育制度に基づく課程、③両方の教育制度に基づく課程の修了証を得ることができる。

授業料はコースに応じて異なるが、約1,000USドル/月(約80,000円)とラ・ウニオン校の3倍以上である。妻の父親(日本生まれの日系人)は、男児により高い教育を受けさせるという教育方針だったという。

R夫妻はともに日本への出稼ぎ経験があるが、ラ・ウニオン校出身で兄弟がインターナショナルスクールに通っていることからわかるように、日系人の非常に裕福な家庭の出身である。またラ・ウニオン校卒業の夫妻の友人にインタビューしたところ、男性友人は医師一人をのぞき全員が日本への出稼ぎ経験があった。現在はペルーで会社経営、貿易会社社長など、ステータスの高い職業に就いて活躍している。こうした背景には、ペルーの日系人が持つ学校教育への強い思いが反映していると考えられる。

4. 結論

本報告はリマ市および近郊にある日系学校と公立学校の現地調査である。3校という限られた事例のため、ペルーの教育全般について網羅することはできないが、日秘両国の教育事情の違いの幾つかを以下にまとめる。

1. リマおよび近郊の日系私立校は1部制で、公立学校は建物、教員数が十分ではなく、2部制や3部制をとっており、子どもたちが受ける教育内容には非常に大きな格差がある。
2. ペルーの学校は進級制をとっており、公用語であるスペイン語と算数(数学)の試験の成績によっては、落第や留年することがある。日本の学齢制とは異なり、学力を蓄え適応するまで、学力にあった勉強をする柔軟な体制がとられている。年齢の違う子どもたちと勉強することにも慣れていると考えられる。
3. 小学校・中等学校も教員と保護者は毎日、子どもが持参する連絡帳を通して、コミュニケーションをとっている。ペルーの連絡帳は、体調や行事への参加届などの諸形式が全て連絡帳1冊にまとまっており、日本では個別にそうした書類提出が必要なため、日系人保護者としては対応が煩雑と感じる人がいると思われる。
4. 日系人の多くは、日本では非熟練労働に従事しているが、ペルー社会においては相対的に高学歴で経済的にも比較的恵まれた立場にある。日本へのデカセギ労働者は低所得者層という偏見があるが、ペルーの日系人においては当てはまらず、より高度な教育サービスを求めている現状がある。
5. 公立学校の教員は現職として働きながら、大学院通学や通信教育を受けて、積極的な授業改善に取り組んでいた。また、日系校の校長はいずれもペルーの名門大学を卒業し、教育学の専門的な知識を有する。

ペルーは就学者人口の増加や経済成長により教育関連ビジネスの拡大が期待されている(石田, 2011)。と同時に、一定レベルの経済的余裕のある家庭がリマに集中する都市化と貧困問題がより教育格差を深刻化させることが懸念される(福井, 1999)。

今後は、ペルーの教員養成と教員資格、教員の採用や配置について、現地法令の入手や教育行政関係者へのインタビューを実施し、日系人と日秘間の教育事情の変化、就学状況の把握、ペルーの教育改革の動向を捉えていく必要がある。

5. 謝辞

本研究は、文部科学省基盤研究(B)海外学術調査〔課題番号23402059〕「外国籍児童生徒の就学義務に関する法的基盤と制度的支援の国際調査」(研究代表者：所澤潤)の一部により実施された。

今回のペルー調査において、ロイ・デイヴィット・ニシンダ・島袋、小百合夫妻に現地のコーディネートをして頂いた。訪問を快く受け入れて下さった、ホセ・ガルベス校、ペルー・ハボン校、ラ・ウニオン校の先生方に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 福井千鶴(1999)「ペルーにおける都市化と貧困問題ーリマ首都圏における現状とその改善策の一考察ー」地域政策研究(高崎経済大学地域政策学会), 第2巻第1・2合併号, 57-73
- 古屋健(2006)「地域の国際化による日系南米人増加の実態をふまえた教員養成システム導入のための研究」平成15~17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)〔課題番号15330162〕研究成果報告書
- 石田達也(2011)「学校教育リマ」ジェトロセンサー, 47頁
- 工藤 瞳, 江原裕美(2011)『【資料】翻訳「ペルー共和国の総合教育法」』帝国法学, 27(2), 457-503
- 工藤 瞳(2011)「ペルーにおける2003年総合教育法の制定経緯と意義」京都大学大学院教育研究科紀要, 第57号, 627-639
- 西村佐二(2001)「世界の子どもたちはいま⑩ペルーの子どもた

ち」学習研究社

園田智子(2010)「群馬県における外国人相談の現状と課題ー地域の外国人を支える外国人相談員へのインタビューからー」群馬大学国際教育・研究センター論集, 第9号pp.69-79

スエヨシ・アナ(2008)「日本からペルーに帰国した子供たちの教育・生活状況調査報告」平成19・20年度宇都宮大学特定充填研究中間報告書, 栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考えるVol.2, 79-98

杉崎洋一郎(2003)「みんなで楽しく国際交流!世界の中学生(6)ペルーの中学生」学習研究社

所澤 潤(2010)「来るべき日系南米児童生徒就学義務化に対応する教育条件整備と教員養成・研究の研究」群馬大学大学院教育学研究科

田中亜子(2010)「外国籍児童・生徒のための初期指導用日本語教材の開発ー群馬県伊勢崎市境地区における事例報告ー」外国語外国文化研究, 20, 62-74

高橋征嗣、齊藤雅一、佐藤久恵、所澤潤(2006)「日系南米児童生徒の在籍に対応するための教育実習試行の記録」平成17年度群馬大学教育学部体験の科目「外国人児童生徒教育実践演習」実施報告, 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター教育実践開発分野

田島久歳, 山脇千賀子(2000)「第1章 ブラジルおよびペルーにおける日系住民と教育に関する比較分析ー歴史的経緯と現状ー」1998~1999年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)〔課題番号10041003〕研究成果報告書, 在日経験ブラジル人・ペルー人帰国児童生徒の適応状況ー異文化間教育の視点による分析ー, 23頁

【参考HP】

外務省中南米ペルー

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/data.html>

群馬県教育委員会

<http://www.karisen.gsn.ed.jp/boe/htdocs/>

ペルー教育省総合教育法

<http://www.minedu.gob.pe/normatividad/>

(たなか まり・まえだ あきこ)